

岸田政権の原発回帰を許さない！

福島原発事故を忘れてはならない

昨夏、突然原発回帰を言い出した岸田総理は、国会での審議を避け続けながらGX（グリーン転換）実行会議を軸に、原発の全面活用路線に突入しようとしている。再稼働の強行、原発の運転期間の延長、次世代型と称する原発の新増設などを掲げている。福島原発事故以降の国の原発政策の全面的な転換である。

民主主義を蹂躪する岸田政権

あの悲惨な福島原発の事故を経験した国民世論は原発への恐怖と不安感を募らせた。国は「可能な限り原発依存度を低減する」「原発の新増設とリプレース（建て替え）は想定していない」との政策を掲げた。しかし、財界と岸田政権は、ウクライナ戦争による資源価格の高騰を千載一遇の好機とし「脱炭素」を口実に、これまでの施策を投げ捨て、原発政策の抜本転換を推進しようとしている。そのやり方は徹底的に非民主的である。すなわち主権者国民に問いかけることもせず、「国権の最高機関（憲法41条）」にさえ諮らず、パブコメでの批判の声も無視して閣議決定にま



2011年3月14日に爆発した3号機（中央） 2011/3/21 東電撮影

で至った。国会は事後承諾させられると踏んでいる様子だ。こんなことは許されない。人々が、諸団体が、厳しく反対の声をあげ、共同のとりくみをすすめよう。私たち「伊方原発をとめる会」もそのために行動していきたい。

未来に負の遺産を残さない

四国電力は、CMのキャッチフレーズで「未来は変えられる 目指すは人と自然にやさしい社会 幸せが循環する街」とまで語る。それならば、「ほんとうに変えましょう」、「原子力発電から撤退しましょう」と、繰り返し訴えていきたい。

「なくせ！原発」「いいね！原発ゼロ」。私たちは諦めない。未来に負の遺産を残さないために。

目次

- 1P 原発回帰に総反撃を
- 2P 事故は終わっていない
- 3P 第31回口頭弁論の報告
- 4P 黙っていられない2・25講演会
- 5P 第1回ミニ学習会報告
- 6～9P インタビュー（澤上幸子さん）
- 9P 四電の電気代値上げに憤慨
- 10P 再エネと蓄電で / 日程など

第32回口頭弁論

伊方原発運転差止訴訟（松山地裁）

3月14日（火）

- 13:00（原告）松山地裁ロビー集合
入廷できる原告の抽選を行います。
- 13:30 一般参加者集合
13:40頃 傍聴券配布 / 14時頃 抽選
14:15～ 原告・弁護団・支援者で
裁判所門前まで歩む
14:30 開廷
- 報告集会 15時30分頃 から
愛媛県美術館講堂にて（松山市堀之内）

事故は終わっていない-福島原発事故避難者の声

福島第一原発事故から12年、逃れられない後始末

福島第一原発事故・損害賠償愛媛訴訟元原告 渡部寛志

福島では、放射性廃棄物の海洋放出が目前に迫っている。漁業者をはじめとする被災者が「これ以上苦しめられてたまるか!」と断固反対の声を上げる中、政府は今夏からの処理水放出を目指す姿勢を崩さない。

海洋放出を決定した政府は、経産省のホームページで「海水で薄めた後のトリチウム濃度はWHO 飲料水基準の約7分の1未満になります」と安全性を謳い、「ALPS 処理水の処分は“廃炉”と“福島の復興”のため絶対に必要」として、海底トンネル工事を進めさせた。

本当に安心安全なものであるならば、なぜ福島沿岸での放出に固執するのか。東京湾ではダメなのか。現在の処理水発生量は1日当たりおよそ100 m³、大型タンクローリー（20 kl）5台分にまで減っている。東京湾アクアラインの海ほたるPAまでは290km、例えば1日で往復可能なそんな場所で海上放出をしたらいいのでは？

「リスクの拡大」と東電自身が

しかし、それができない理由を、東京電力はホームページに次のように記載している。「ALPS 処理水を敷地外で保管・処分することは、リスクのあるエリアの拡大ならびに更なる負担を強いることに繋がることから、望ましくないと考えています」、また「海上からの放射性廃棄物の海洋投棄はロンドン条約で禁止されています」と。そして、「ロンドン条約では陸上からの排出は禁止していないと解される」ので海底トンネ

ルによる海洋放出をするというのだ。

政府・東電は私たちに難題を突き付け、あえて混乱させたまま強行しようとしているように思えてならない。そもそも、原発事故の法的責任を認めない国、過失責任を認めない東京電力を、私たちはどうやって信用し、信頼しろと言うのか。



渡部寛志さん

裁判所が公正な判決をしたなら

もし、昨年6月17日の原発事故被害者訴訟最高裁判決が、「国に責任あり」という結果であったならば、被害者を取り巻く状況は大きく変化していただろう。『国=加害者』となれば、国は『支援』から『償う』立場に変わる。そして、賠償・除染・廃炉・放射性廃棄物処分などの被災者救済・被災地復興に関わる全てを、加害者として逃げ道なく取り組まなくてはならなくなっただろう。

またその過程で、多くの国民が自分たちの問題として原発事故に向き合うようになれば、『原発回帰』を進める国のエネルギー政策や原子力行政にも多大な影響を与えるようになっただろう。そう思うと悔やまれてならない。

強いられる過酷な経験でも進んでいく

「私たちは過酷な経験をするよう強いられてきた。自分で望んで茨の道を歩んだわけではない。それはこれからも続くでしょう。ともに力を合わせ、進んでいきましょう。どうせ逃れられないのですから。」

愛媛避難者訴訟を闘ってきた仲間の言葉が、受け入れ難い現実を物語る。



最高裁での弁論に向かう原告団と支援者（2022/5/16）

第31回口頭弁論報告

丁寧な証人調べを原告側は要求

12月13日、松山地方裁判所で第31回口頭弁論が行われた。寒波襲来で風も強い日だったが、原告32席、一般傍聴37席を埋める参加者があった。

原告側は火山の具体的危険性についてのプレゼンテーションを行い、証人に関する弁護団の意見陳述、塩川まゆみさんの意見陳述が行われた。

火山事象に関する具体的危険

原発の設置、運用に関わる自然現象として火山事象は大きな争点である。今回の準備書面は、この問題でのプレゼンテーションの内容だった。

争点となっている、巨大噴火の可能性、火砕流の到達可能性、噴火規模・層厚などを論じ、「火山影響評価ガイド」の不合理性、被告側が同ガイドを適用する際の不合理性を明確に整理した。

なお、火山事象に関わるこれまでのほぼ全ての裁判例で「現在の火山学の水準において、噴火の中長期的予測ができないこと」と、「噴火の発生可能性について、相当の時点で相応の精度で把握することは困難であること」を認めている。

中川弁護団事務局長が意見陳述

裁判は、証人尋問に入る段階を迎えている。弁護団は、学者・専門家などの10名を、四電

報告する中川創太弁護士
(弁護団事務局長)



側は4名を証人として呼ぶことを提案した。裁判所と原告・被告の三者による進行協議（非公開）で厳しい応酬が続いている。

四電側は、他の裁判所での証言調書などで代用可能などとし、小人数の出廷にとどめようとしている。また、伊方原発と福島事故は無関係と述べて福島事故の被害者の出廷にも反対している。

原告弁護団は学者・専門家から裁判官が直接の証言を得ることの重要性を指摘した。尋問を通じてその解明が容易になる点などを挙げて、出廷の必要性を述べた。また、福島事故の解明は、伊方原発の運転の適否を判断するうえで不可欠であると強調した。

原告の意見陳述より

「画期的な判決」を信じている

塩川まゆみさん（内子町在住）

塩川まゆみさんの、熱い想いのこもった意見陳述に、傍聴席から思わず拍手が起り、しばらく続きました。その訴えの要点を以下にお伝えします。

3・11東日本大震災を東京で経験。当時1歳の子どもを抱きしめて家具の少ない和室で震度5の揺れが収まるのを待った。福島第一原発から250キロ離れた東京でさえ放射線量が一時的



松山地裁に向かう
原告・塩川まゆみさん（中央）

に大きく上昇し、多くの人が首都圏を脱出。インフラも止まり大都市の脆弱性を痛感。3人の

【次ページに続く】

子育てのため、縁もゆかりもなく、たまたまブログで知った内子町への移住を決断した。

「なぜ東京からわざわざ伊方原発の近くに移住したか」とよく聞かれるが、日本中が福島 of 悲痛と苦しみを目撃したあとで、原発が再稼働されるわけがないと信じていた。生業も地域社会もすべて破壊し一家離散を余儀なくさせた原発事故は最大級の人権侵害だ。

現在、内子町の町議会議員として働いている。こんな素敵な町を原発事故で失いたくはない。原発事故は紛れもなく人災であり人の手で止められる。

岸田内閣は気候変動対策を理由に原発推進政策に転じたが、最終処理の方法さえ不明の放射

性廃棄物を続々と産出し続けるのは「最高に前近代的」だ。防衛費増額の報道もあるが、海岸線に並べた原発を攻撃されれば日本の国土も国民も財産も不可逆的に損なわれる。これこそが防衛上の脅威である。

この訴訟で意見陳述をしてきた 56 人を含む 1500 人余の原告はもとより、原発・核をやめて命や環境、子々孫々を守りたい人々の想いやその歴史、膨大なパワーと共に、自分はこの場に立っている。ひとりではないと力強く感じる。

三権分立のはずが立法府と行政府が本気で国民の基本的な人権を守る気がないのが現実だ。せめて裁判所にはこの二権と対峙し、国は私たちの命を守ってくれるのだと安心させてほしい。

【速報】 福島をくり返すな！ 原発回帰に黙ってられない 2・25 講演会

「福島原発事故 12 年目 原発推進は愚かですごく危険 — 愛しい人のために原発からの命の守り方を学ぼう」

2 月 25 日、フリーライターの守田敏也さん(兵庫県篠山市原子力災害対策検討委員) を迎えて、

松山市総合コミュニティセンター
大会議室にて



上記タイトルの講演が行われました。会場の松山市コミュニティセンターの大会議室には、ズーム 9 名を含めて 90 人余の参加がありました。(講演要旨は次号で紹介)

また、講演に先立って、中川創太・伊方原発をとめる弁護団事務局長が報告。4 月以降、午前午後にわたる証人尋問が行われる予定で勝負の時を迎えていること、そのために原告・支援者らの一層の熱い支援が求められるとのメッセージがありました。

伊方原発の廃炉を求める 3・11 愛媛集会&デモ

2023/3/11 (土)

集合は松山市駅前 14:00 ~

坊っちゃん広場に集合



(昨年の 3・11 集会
坊っちゃん広場にて)

福島原発事故は終わっていません。原発の「最大活用」など許されません。環境にも人にも優しい、持続可能なエネルギーで暮らせる社会の実現を訴えましょう。

14:00 ~ 音楽、リレースピーチ、集会宣言、パネルアピールなど

14:45 ~ デモ行進スタート 坊っちゃん広場⇒千舟町⇒大街道⇒県庁前流れ解散 (予定)

—映画を通して真実を伝えたい—

講師：伊東英朗さん（ドキュメンタリー映画監督）

1月24日午後、伊東英朗さん（ドキュメンタリー映画監督、元・南海放送ディレクター）に講演していただきました。

伊東さんは、1946年から始まった太平洋核実験による被ばくの影響を追い続けたドキュメンタリー番組を2004年から次々と制作し、その集大成として映画「放射線を浴びたX年後」「放射線を浴びたX年後2」を制作。ギャラクシー賞、芸術選奨文部科学大臣賞など数々の受賞歴をお持ちです。

次から次へと繰り出されたエピソードの数々を、箇条書きでご紹介します。

* アメリカのビキニ環礁での水爆実験は第五福竜丸だけでなく、延べ1000隻近くの船を被ばくさせたが、その後約10年間に繰り返された100回以上の核実験による被ばくや被ばくマダグロ水揚げの事実が隠蔽された。

* アメリカ本土も、ネバダ州などで繰り返し核実験を続けた結果、深刻な放射能汚染に見舞われたが、知識人を含む多くのアメリカ人が未だにその事実を知らないでいる。

* 1950年代、実験場近くのネバダ州ラスベガスでは「核実験見学ツアー」が多く実施されて、万単位の観光客が核爆発の様子を鑑賞し被ばくしていた。



真実を伝えたいとの思いが参加者にひしひしと伝わりました

* 1950年代半ば、セントルイスで母親たちと科学者が乳歯を収集し調査。核実験開始直後の頃の子供たちの乳歯と比べて、その数年後の核実験最盛期の頃の子供たちの乳歯では、ストロンチウム90が30倍に増えていた事実を発見。彼女たちの運動が、ケネディ大統領の心をとらえ、ついには大気圏内の核実験禁止条約に結び付いた。

* アメリカ人に、全土が放射能汚染され、日々深刻な健康被害が出ている事実を是が非でも知らせたい。その事実を知った上でアメリカ国民が何をどう選択するか、議論してもらいたい。予定としては先ず3月31日に東京の記者クラブで完成試写会を行い、今年の夏からのアメリカ国内での上映を目指している。

参加者からは「知らないことばかりで、とても驚いた」「興味深い話だった」「原爆の問題は核を扱うという点で、原発問題に深く結びついていると改めて思った」などの感想が寄せられて、第1回の学習会は成功裡に終了しました。

.....

「ミニ学習会」の第2回は、2月28日にコムズ会議室2で開催。「2030年 四国における電力脱炭素化を実現するために」講師：和田幸さん（当会の事務局次長、日本科学者会議愛媛支部会員）です。第3回については10Pを参照ください。



ネバダで取材する伊東監督。すぐに警備の担当者がやってきた。

原発から3キロで被災、跳ね上がる線量計

NPO 法人えひめ 311
副代表理事兼事務局長 澤上 幸子さん

澤上幸子（さわがみ さちこ）さんは、東北大震災で原発から直線距離で3キロの地点で被災した避難者です。同時に、NPO法人えひめ311の副代表理事として避難者の支援者であるという特異な立ち位置にある方です。私たちが知らない震災当日の様子などを聞かせてもらいました。

原発の直近で東北大震災に遭遇

問い：まずはご出身地などからお尋ねしますが・・・

澤上さん：松山市で生まれ育ちました。結婚後は夫の住む福島県の大葉町で夫の両親などと同居しました。その後、子ども（双子）が生まれ、夫の妹とその子も同居し、震災時には9人家族の大所帯でした。夫は会社員で、私は社会福祉協議会（以後は社協と略記します）の職員でした。

問い：2011年3月11日の大震災当日の様子を聞かせてください。

澤上さん：15時の予約で高齢者宅を訪問するため、社協の事務所に私が待機中の14時46分頃に地震が発生しました。立っていることが出来ない大きい揺れでした。建物が潰れそうな怖れを感じて、よろけながら外に出ました。そこら中に地割れや亀裂が発生していました。駐車場にある車が、ピョンピョンと飛び跳ねていました。屋根瓦は幾つも崩れ落ちていましたが、建物自体は壊れていませんでした。後から聞くと雪の重みに耐えられるような頑丈なつくりのため、阪神淡路大震災とは被害の様相が違うそうです。4回くらいはとても大きい揺れが来ました。

問い：それから、どうなったのですか？

澤上さん：デイサービスの高齢者が社協内に60人ほど居たので、職員で手分けして安否を確認したところ、幸い全員の無事が確認できました。そこで家族が気になったのですが電話は通じません。上司は、家族と連絡がつかない者は帰宅してよいと言いました。同時に、社協の事務所は災害時の避難先に指定されているため多数の避難者が来るだろうから、可能な者は戻って欲しいとも言われました。そ



澤上幸子さん
(えひめ311事務所にて)

こで自宅へ戻ろうとしたのですが、道路が大渋滞でした。亀裂や地割れで自動車では身動きが出来ず、走って戻りました。

緊急地震速報は鳴りっ放し

澤上さん：自宅で心配だったのは寝たきりの祖母でしたが、家屋の倒壊を心配した義父が祖母をビニールハウスに連れ出してくれていました（私は知らなかったが、勤め人の義父がその日偶然休みでした）。義母や子たちも全員無事で、家も壊れてなかったのでホッとしました。

10分ほど家に居て、直ぐに社協に引き返しました。3時の予約の方や避難者が押し寄せる社協が心配だったためです。

問い：社協に戻ってから、どうなさいましたか？

澤上さん：社協には当日30人くらい職員がいましたが、自宅に帰ったままで戻って来られない人もいて、戻れたのは10人ほどでした。その職員で手分けして、通所者の家に救出・捜索に向かいました。多分地震の1時間後くらいのことです。その間、細かい揺れは何度もあり、緊急地震速報は鳴りっぱなしでした。

捜索先は全戸とも避難して留守でした。社協に戻ったのは午後5時頃だったのでしょうか。社協が事故の際の避難場所になっているので、続々と人々が押し寄せて来ていました。

黒く巨大な壁のような津波に恐怖

問い：津波は、どうだったのですか？

澤上さん：愛媛生まれの私に津波の予備知識は

なかったのですが、福島の方々はそれなりに危険性を感じていたようでした。たまたま3階にいたため直接目にしましたが、波とか海とかでなく巨大な黒い壁が押し迫って来る恐怖を感じました。また奇妙なことに、海の水の上なのに火が燃えていて、その火が家屋などに飛び火をして火事を発生させていくのを見ました。本当に恐ろしい光景でした。

問い：その晩は、どうして過ごされましたか。

澤上さん：3月の福島は小雪の舞う寒い時期で、大規模な停電がございましたが、社協には自家発電装置があったので灯かりをとることが出来ました。また、近所の農家からお米を提供してもらってご飯を炊き、お握りをつくって、双葉町の公民館にも配りました。双葉町役場も、社協の中に災害対策本部をつくることになって機械などを運び込んで来ました。

その夜の社協では、大勢いるので寝るスペースはなく、座って明るくなるのを待つしかありませんでした。避難者の中には親御さんと連絡が取れない高校生たちもいました。夜間なら家族が一緒に避難でしょうが、昼間の災害ですので家族がバラバラでした。

問い：福島原発の事故を初めて知ったのは、いつどんな場面でしたか？

澤上さん：11日の夜社協で、原発から近い区域（記憶は曖昧ですが1キロ圏内くらいだったか？）の避難命令が出て知りました。でも、その時は実感がなく、事故を起こしたのではなく安全のための避難かと思っていました。まさか自分が避難することになるなんて思ってもみませんでした。

原発の爆発の音を聞き 放射性降下物を浴びて

問い：大震災2日目の様子を教えてください。

澤上さん：12日には社協の隣の双葉厚生病院（原発から直線距離3キロ）では患者さんたちの避難・搬送が始まり、私たちもデイサービスの高齢者の避難を始めました。

最初は次々に大型バスが来ていたのですが、そのうちにバスが来なくなり、自衛隊のヘリで高齢者を運ぶことになりました。近所の双葉高校のグラウンドまで社協のワゴン車で運ぶことにして、2往復くらいした時に大きい爆発音がしました。

運んでいたお年寄りに「(地震で)どこかの橋が折れたのかなぁ」と言うのと、「いやー原発が爆発したんだべー」と言うので、「嘘だぁー」と言い返しました。ラジオをつけて、

原発（1号機）の爆発音だと分かりました。

双葉高校のグラウンドにいと、空から黄色い綿状のものがフワリフワリと落ちてきました。駐車していた軽トラの荷台は黄色く染まりました。私は雨合羽を着ていたのですが、その黄色いものが落ちた跡に小さい穴が空いて、広島の前爆を連想して怖くなりました。1秒でも早く逃げたいけど、高齢者を見捨てて逃げられず、外にいる自分は「死ぬのかなぁ」と思いました。

社協に帰ると、役場の人たちは防護服を着ていて（私たちに防護服の支給はなかった）、「窓辺に近づくな」と言っていました。双葉厚生病院の看護婦さんたちは病人などの搬送を手伝っていたけど建物の外で半袖の人もいて、泣いていました。きっと被ばくの知識があったのでしょう。その後、家族のことが気がかりで一度自宅に戻ったけど、避難していて誰もいませんでした。

高齢者を乗せて双葉町を脱出

澤上さん：夕方の6時頃に、職員が3人ずつ自分の車で運べば何とか全員避難できるということで、社協の事務所には私が鍵をかけ、川俣町に避難しました。普通は40分程の川俣高校の体育館に着いたのは、5～6時間かかって真夜中でした。

車中では、ジイーちゃんやバアーちゃんが、「戦争を思い出した」と言って戦争中の話をしたり、お孫さんの話などをしていました。きっと私たちを励ましてくれていたのだと思います。水も食べ物もなく不安な道中だったけど、そうした会話が随分励みになりました。

体育館は電気もなく真っ暗で人がいっぱいいるので、人を踏まずに入るのが大変でした。その場の責任者が誰かも判らず、とにかく体育館の真ん中あたりを陣取って、真ん中に認



休止したままの双葉厚生病院

知症の人を眠らせ、職員がその周りをぐるりと囲みました。オムツと栄養補給飲料はたくさん持ち出していましたが、オムツ替えをどうしたら良いかと悩みました。12日の深夜のことです。

3日目に夫と再会し落涙

問い：翌日に川俣町でご夫君と再会したのですね。

澤上さん：夫とは連絡が取れなかったのですが、13日の昼前に捜しに来てくれて再会出来ました。それまで緊張していたせいか、夫の顔を見ると涙が止まらなくなりました。そして職場を離れることを決意して上司に伝えたところ、「子どもさんも小さいし」と快く認めてくれました。みんなを裏切るような、見捨てるような心苦しさを抱えながら、川俣高校を後にしました。

二本松市では、双葉町から出る人のスクリーニング(放射能検査)がありました。夫と私と社協の同僚の3人が一緒に受けたのですが、私だけがピピピピピとけたたましく警報音が鳴りました。爆発の時に外にいたからだと思います。検査係から「服と靴を処分してください」と言われました。でも、着の身着のまま着替えもないのに、どうしようと思いました(その後避難途中のスーパーで洋服などを購入)。

結局13日はいわき市の親戚の家に家族9人全員が避難しました。子どもたちの顔を見ると涙が出ました。その日はチャンとした夕食でビールも付けてくれていましたが、味は全くしませんでした。

3号機爆発で愛媛への避難を決心

問い：14日には3号機が爆発したのですでしたね。

澤上さん：ええ。それでお義父さんが「もう愛媛に行け」って言い出し、福島に居てはいけないと思い愛媛に戻る決意をしました。私たちの子二人(3歳の双子)と夫の妹の子(小学4年生)を連れて、夫が車で送ってくれました(夫は後日に避難することにして)。14日の夜は神奈川の親せき宅に泊めてもらって、15日に松山の実家に辿り着きました。

問い：松山での避難生活を聞かせてくださいませんか

澤上さん：最初は愛媛の人の普通の生活ぶりに苛立っていました。福島に家族を残し、避難所に職場の人や利用者さんを残してきたとい



東北・四国心行き交う盆踊り大会(石手寺境内)

う後ろめたい思いが強く、笑顔を見ると耐えきれない気持ちでした。通帳も印鑑も写真も家に置いてきたし……。17日には夫も来てくれましたが、これからどうなるのだろうかと不安でした。

避難者同士の交流で心の温め合いを

問い：避難者の方々のご苦労も、さぞ大変なのでしょう。

澤上さん：私はもともと愛媛県人ですから友人知人もいますが、縁故のある避難者は少なく、精神的な孤立感が大きいのです。言葉さえ通じにくいこともあり、善意ではあっても特別扱いされ、時には差別視もあって、私などと比べ物にならない辛い避難生活だと思います。

問い：石手寺の加藤俊生住職の呼びかけで、避難者のみなさんが集まったとのことですが。

澤上さん：2011年5月24日のことでした。福島弁で話せることだけで心は温かくなりました。そうした交流活動を続ける中で、2012年9月にNPO法人「えひめ311」を結成しました。代表理事に渡部寛志さん、副代表理事兼事務局長に私が選任されました。

問い：どんな活動をされているのですか？

澤上さん：愛媛と福島の懸け橋となるために、避難者を支える活動、被災地復興の支援そして今後の災害への備えの3分野の活動をしています。事務所を構え、常駐スタッフも2名配置し避難家族の相談も受けています。私自身は支援している気はなく、共に悩み共に解決をめざす、支え合っている間柄だと思っています。

問い：政府の復興、復興の掛け声をどう感じますか？

澤上さん：双葉町では駅の周辺は「住めるようになった」と言いますが、私の家は今も自由に立ち入れません。何より7代続く農家です

が、東京ドーム7個分のわが家の田んぼは、放射能に汚染されたフレコンバックが山積みの仮置き場で撤去の見通しも全くありません。

問:最後に「とめる会」の活動についてご意見、ご注文は？

澤上さん:「とめる会」の活動は、メディア等を通じてよく知っています。日頃から、原発のこれからはどうなっていくのか心配しております。私たちのような避難者を二度と生まないようにするにはどうしたらよいか、一緒に考えて行けたらと思っています。また、避難者の気持ちに寄り添い、理解した活動を期待しています。

インタビューを終えて

大震災直後の混乱と苦難、遠い異郷に避難された方々の悲しみを伺えば、誰もが一刻も早い原発の稼働停止と廃炉を願わざるを得ません。だからこそ、岸田政権の原発回帰の政策には心の底からの憤りを一層強くしました。

インタビューの手始めにご夫君との出会いをお尋ねしたところ、中東のイスラエルと聞き驚いた。とは言え、そのいきさつを尋ねてはとてども紙面に収まらないと、疑問を封じ込めました。(H)

四電の電気代値上げに憤慨

原発動かして黒字なのに何故？

「1月の電気料金が3万1千円で参ったわ」とMさんがぼやいた。家族3人で、昨年同時期の2倍の額という。「まさか!」と、うちに帰って調べたら、他人事ではなかった。うちも前年のちょうど2倍の電気代で、金額にひっくり返るほど驚いた。どちらの家もオール電化住宅で、四電の値上げ攻勢に最初に狙われた。

「最終損益が18億円の黒字」、伊方原発3号機の「稼働で電力販売量が伸びたほか、円安の進行で生じた為替差益が利益を押し上げた」と新聞が報じているというのに、四電は4月1日から平均で28%余りの値上げを国に申請中だ。原発再稼働で利益を上げていて、値上げ申請？

大手電力会社10社のうち、値上げ申請は7社だが、四電と同様、原発を再稼働している関西電力、九州電力は赤字でも値上げ申請していない。それなのに、黒字を出して、3号機稼働中なのに値上げするって常識的にはあり得ないでしょ！

やるべきは再生可能エネルギー積極導入では？

四電に見切りをつけて新電力に転換した先進的な家も多い。ところが、四電は、昨年4月から今年1月までの8か月余りの間に社員272人が計1万1413件にも上る新電力の顧客情報を盗み見ていたという。信じられない不祥事だ。送配電会社が独立した会社になっていないという根本の問題が露呈したものである。

そしてもう一つ。脱原発に舵を切って、再生可能エネルギーの導入を積極的に進めるべきだ。経産省の2030年発電費用の試算でも、太陽光8.2円、原発11.7円以上と、今や「原発発電は安い」との宣伝は通用しない。重大事故対策、廃炉費用など、原発による発電コストは、今後増えることはあっても減ることは期待できない。SDGs的にもまったく将来性はゼロ。

やるべきは、原発やめて再生可能エネルギーに転換することだ！(K)



毎日・愛媛などの報道記事によるコラージュ

化石燃料の値上がりに翻弄されないために 再生可能エネの普及を本気で取り組め

世界的な発明として、今、再び日本の太陽光発電が注目されている。NHKのサイエンスZEROは次の様に解説している。

発明者は日本人でその中で、最も注目されているのが、「ペロブスカイト太陽電池」です。曇りや雨の日、さらに室内の弱い光でも発電することができることに加え、薄くて軽いいため様々な場所に設置することが可能で、世界中の企業が実用化に向けた開発にしのぎを削っています・・・

これに加えて日本は大容量蓄電池の技術でも世界の最先端に行く。すでに豊前蓄電地変電所などで実用化されているNAS電池や、これと同様にコンテナ型で普及が始まったレドックス・

フロー電池も実用に達している。揚水発電所を小型で俊敏にしたような蓄電システムの構築がすでに可能なのである。

画期的な太陽光電池と蓄電の機能を組み合わせ、さらに風力やバイオマスなどを組み合わせると、夜間でも必要な電気を供給できる。その技術があるのに本格的に使おうとしない背景に、「原発」の存在がある。

はっきりと、国に電力会社に求めよう。危険な原発をやめ、安全な電力に変えよと。LNGなど、化石燃料の値上がりに翻弄されるエネルギー政策でなく、再エネと蓄電を組み合わせ、災害にも強い電力網に変えよと。

今後の日程・行事案内

- ▼伊方原発いらん!! 松山市駅前定例アクション
4月12日(水) 17:30～18:00
(選挙期間中のため第2水曜日に実施)
5月3日(水) 17:30～18:15
- ▼伊方原発の廃炉を求める愛媛集会&デモ
3月11日(土) 14:00～15:30
松山市駅前坊っちゃん広場
集会後、愛媛県庁前までデモ行進
- ▼伊方原発運転差止訴訟 第32回口頭弁論
3月14日(火) 14:30開廷 松山地裁
原告の方は13:00 裁判所ロビー集合
傍聴希望の方は13:30
*報告集会 15:30頃～ 愛媛県美術館講堂
- ▼第3回伊方原発をとめる会ミニ学習会
4月25日(火) 14:00～
コムズ会議室2
「宇和島市津島における小水力発電の取り組み(仮題)」講師:村田 武さん(元愛媛大学農学部教授、「自然エネルギー愛媛」代表)
- ▼伊方原発をとめる会 第13回定期総会
5月28日(日) 13:30～
コムズ 大会議室
記念講演:海渡 雄一 弁護士
(脱原発弁護団全国連絡会共同代表)

会費とカンパの訴え

- 年会費1口 個人 1,000円 / 団体 3,000円
/ 学生 500円
【会費送金先】宛名は、「伊方原発をとめる会」
■郵便振替 01610-9-108485
■ゆうちょ銀行 通常貯金 記号 16190
番号 17866721
[ゆうちょ銀行以外から] ゆうちょ銀行
六一八支店 普通預金 1786672
■伊予銀行 本店営業部 普通預金 4679997

いっそうのご支援をよろしく申し上げます

- * これまでの裁判資料(訴状、原告意見陳述、原告準備書面、書証)などは、伊方原発をとめる会のホームページに掲載しています。ダウンロードができます。
- * 伊方原発をとめる会からのお知らせやご案内を会員の皆さまへメールでお届けしています。メール配信をご希望の方は、ikata-tomeru@nifty.comへお知らせ下さい。
- * ホームページを充実させ、情報の迅速な発信に努めています。ぜひ、ご覧下さい。
URL : <http://www.ikata-tomeru.jp>